

よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



22

よろこびの知らせ
第22集

目 次

危機一髪	1
使徒 23:11-16	
私のように	10
使徒 26:26-29	
福音の勝利	19
使徒 28:30-31	
幸いである	28
黙示録 1:1-3	

ここに収められたメッセージは、2021年7~8月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

危機一髪 使徒 23:11-16

23:11 その夜、主がパウロのそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならない。」と言われた。

23:12 夜が明けると、ユダヤ人たちは徒党を組み、パウロを殺してしまうまでは飲み食いしないと誓い合った。

23:13 この陰謀に加わった者は、四十人以上であった。

23:14 彼らは、祭司長たち、長老たちのところに行って、こう言った。「私たちは、パウロを殺すまでは何も食べない、と堅く誓い合いました。

23:15 そこで、今あなたがたは議会と組んで、パウロのことをもっと詳しく調べるふりをして、彼をあなたがたのところに来てもらうように千人隊長に願い出てください。私たちのほうでは、彼がそこに近づく前に殺す手はずにしています。」

23:16 ところが、パウロの姉妹の子が、この待ち伏せのことを耳にし、兵営にはいつてパウロにそれを知らせた。

一、パウロの苦しみ（使徒 21 章）

パウロは、自分が受けた苦しみをこんなふうに数えあげています。「ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、勞し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありまし

た。」（コリント第二 11:24-27）これは、パウロが三回の伝道旅行を振り返って書いたものです。「使徒の働き」に書かれている以外にも、パウロは、こんなに多くの患難を通過してきたのです。それは、命がいくらあっても足りないような患難でしたが、神はそのつど、パウロをそこから救い、守ってくださいました。

こうした患難の中で、一番パウロを苦しめたのは、「同国民から受ける難」とあるように同じユダヤ人から受けたものだったと思われます。福音を受け入れたのは、主にユダヤ人ではない人たち、異邦人で、ユダヤ人は各地でパウロに反対し、その町から追い出しただけでなく、パウロが行った先の町まで駆けつけ、そこで騒ぎを起こしたりしました。私は、何人もの日本人から、「同じ日本人だからと心を許したところ、とんでもない扱いを受けて、つらい思いをしました」という体験を聞いてきました。自分が生まれた国ではないところにいる私たちですから、「同国民から受ける難」を少しは理解できるかもしれませんが、パウロの受けた苦しみは、私たちの受ける苦しみと性質も程度も違っていました。

なぜ、ユダヤの人々はそんなにもパウロを憎んだのでしょうか。当時のユダヤの人々は、神を信じる異邦人にもユダヤの律法を強要していました。しかし、パウロは、人を救うのは律法のしきたりを守り行うことによつてではない。ユダヤ人であっても異邦人であっても、キリストを信じる信仰が人を救うのだと説きました。それで、キリストを信じようとしないユダヤ人やキリストを

信じる信仰よりもユダヤの伝統を守ることに価値を置く人たちは、パウロに反対し「異邦人の中にいるすべてのユダヤ人に、子どもに割礼を施すな、慣習に従って歩むな、と言って、モーセにそむくように教えている」（使徒21:21）などと言って中傷しました。

しかし、それは根拠のないものでした。パウロは、異邦人にユダヤの律法を強要しませんでした。ユダヤ人がユダヤの慣習を守ることには反対していません。テモテに割礼を受けさせていますし、彼自身もユダヤの律法に従って誓願を立てていました。そして、エルサレムに上ったおり、誓願の期間が満ちたので、誓願を立てていた他の人たちと一緒に供え物をささげるために神殿に詣でたのです。

ところが、パウロに反対していた人たちは、神殿でパウロを見つけると、こう叫びました。「イスラエルの人々。手を貸してください。この男は、この民と、律法と、この場所に逆らうことを、至る所ですべての人に教えている者です。そのうえ、ギリシヤ人を宮の中に連れ込んで、この神聖な場所をけがしています。」（使徒21:28）これは言いがかりに過ぎません。パウロと一緒にいたのはみなユダヤの人々ばかりで、パウロは律法に従って行動していました。神殿はユダヤ人にとって最も神聖なものでしたから、彼らは、パウロを攻撃するためにそう言って、人々をあおったのです。彼らは、律法に熱心であったから、神殿を尊重していたから、パウロに反対したのでなく、キリストを信じたくなかったからだ

けでした。

神は、ユダヤの人々を選び、彼らにキリストの到来を予告し、キリストをユダヤ人として生まれさせ、ユダヤの人々が真っ先にキリストを信じることを願っておられたのに、彼らはそれを拒否したのです。人々の不信仰、これが、パウロが受けた苦しみの原因でした。それは、使徒7章のステパノの説教の中にある通りです。ステパノはその説教で、「あなたがたは、御使いたちによって定められた律法を受けたが、それを守ったことはありません」（使徒7:53）と言いました。ステパノがそう語ったとき、人々はステパノを町の外に連れ出し、石で打って殺したのですが、そのとき、人々の上着を預かった青年がサウロ、かつてのパウロでした（使徒7:58）。パウロも、ステパノの説教を聞いていたのに、その時は、他のユダヤ人と同じように、神に逆らい、キリストを信じようとしなかったのです。しかし、神の恵みによってキリストを信じる者となりました。そして、どんなに、同国人に苦しめられても、彼らもまた自分と同じようにキリストを信じる者になってほしいと願って、こうした苦しみに耐えて、キリストを証しし続けてきたのです。

二、パウロの証（使徒22章）

反対者たちは神殿で騒ぎを起こし、パウロを神殿から引きずり出しました。そして、パウロに襲いかかろうとした時です。エルサレムの治安を担当していたローマの千人隊長がその中に割って入り、パウロを捕まえ、鎖につながしました。千人隊長がパウロの身柄を兵営の中に入

れようとしたとき、パウロは、千人隊長に「人々に話をさせてほしい」と願い出ました。普通なら、そんな願いは聞かれるはずがないのですが、神の特別な働きにより、それが許され、パウロは、鎖につながれた手をふりながら、人々に、イエス・キリストとの出会いを語り出しました（使徒 22:21-22）。人々が自分を訴えて押し迫っている、そんな状況の中では、誰もが、自分の身の安全を第一に考えるものですが、パウロは、自分のことよりも、キリストを証しすることを第一に考えました。キリストを証しする機会があれば、どんな場所でも、どんな状況でも、キリストを伝えたい、福音を語りたいという情熱が、彼の心にあったのです。

ギリシャの哲学者は、人にもものを伝えようとするには三つのものが必要だと言いました。「ロゴス」、「エソス」、「パソス」、つまり、論理、倫理、情熱です。論理の無いもの、真理に矛盾するものは、当然、人には伝わりません。また、いくら論理が正しくても、その内容が倫理に反するものであれば、それもまた受け入れられません。しかし、論理が正しく、倫理的にも素晴らしいものであっても、それが情熱をもって語られなければ、人の心には届かず、受け入れられないのです。的に矢を当てることに例えるなら、論理は「的」です。的外れな議論には意味がありません。倫理は「矢」です。真っ直ぐな矢でなければ、真っ直ぐ「的」に向かって飛びません。しかし、その「矢」を飛ばす力は、「弓」にあります。語る人の情熱が、その言葉を人の心に届けるので

す。情熱のない、眠気がするような話では、誰も聞いてくれません。私たちがキリストを証しする情熱は、私たちがキリストに出会った体験から生まれます。しかし、それは、カビの生えた昔話として語られてはなりません。語る者が、日々、キリストに出会っていることによって、それは、キリストとの出会いが、今、ここで起こることとして語られなければならないのです。

私は日本の神学校で、毎年、羽鳥明先生の講義を受けました。先生は、どんな課目でも、最初の講義で、ご自分の救いの体験を話しました。16歳のときバーネット先生に導かれてイエス・キリストを信じたこと、アメリカ留学中にバーネット先生が亡くなったとの知らせを受け、献身の思いを新しくしたことなどを涙をぬぐいながら話されました。毎回、全く同じ話でしたが、聞くたびに感動があるのです。先生は静かに語りましたが、そこには、本物のキリストへの愛が、その愛から生まれた情熱がありました。「情熱をもって語る」と言っても、身振り手振りを加えて、大声で話す必要はありません。そうしたことは、度が過ぎると芝居じみて、真実さが伝わりません。訥々とした話でもいいのです。「キリストが私を救ってくださった。あなたも救われて欲しい」と願う、神と人への愛が原動力となった証が、人々にキリストを届けるのです。

三、パウロの救い（使徒 23 章）

人々はパウロの証しを静かに聞いていましたが、反対者たちが騒ぎ出したため、パウロの話は途中で遮られ、

パウロは兵営の中に連れて行かれました。

その翌日、千人隊長は、ユダヤの最高法院を召集させ、パウロを祭司長や議員たちの前に立たせました。パウロが「兄弟たち。私はパリサイ人であり、パリサイ人の子です。私は死者の復活という望みのことで、さばきを受けているのです」（使徒 23：6）と言ったため、議会が混乱しました。千人隊長は、パウロを保護するため、パウロを再び兵営に連れ戻しました。

その夜のことで、主がパウロのそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならない」と言われました（11 節）。パウロは同じようなことをコリントでも体験しています。使徒 18:9-10 にこうあります。「ある夜、主は幻によってパウロに、『恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから』と言われた。」

「恐れるな」、「勇気を出しなさい」という言葉がパウロに与えられたということは、パウロが恐れたり、勇気を失くしたりしたことを表しています。聖書には勇敢に信仰に生きた「信仰の勇者」たちが大勢登場しますが、パウロはその一人でした。けれども、聖書はパウロや他の信仰者たちが決して恐れることも、弱くなることもなかったと言っています。力強い信仰の生涯を送った人も、一日一日を取り上げれば、恐れや迷いの中にいる

日もあり、アップ・ダウンがありました。しかし、その人たちが、落ち込んでも沈み込まなかった、弱くなっても倒れてしまわなかったのは、そのつど、神の救いと助けを願い求め、神の恵みによって強くされていったからです。

私たちが強いかわ弱いかわ、能力があるかないかわ、賜物が与えられているかわいないかわ、それは、信仰の歩みや神のための働きにとって大きな問題ではありません。大切なのは、私たちを強くしてくださる神の恵みです。パウロは「私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです」（コリント第一 15:10）と言っています。ある著名な神の働き人は「私はとても臆病な人間です」と告白していました。しかし、それだからこそ、その人は神に頼り、神の恵みによって強くされ、神のために大きな働きをすることができたのです。

主が、パウロに「勇気を出しなさい」と言われたのは、パウロを暗殺しようとする計画が立てられている時でした（12節）。しかし、パウロの「姉妹の子」（甥）が、そのことを耳にし、それをパウロと千人隊長に知らせました。千人隊長は、すぐに歩兵二百人、騎兵七十人、槍兵二百人を準備させ、その夜のうちに、パウロを総督のいるカイザリヤに送りました。こうしてパウロは間一髪のところで暗殺から救われました。まるで、映画の一場面のようなのですが、神がパウロの家族やローマの千人隊長を用いて、パウロを守ってくださったのです。

11 節に「主がパウロのそばに立って…」とありました。「そばに立つ」というのは「味方になる」という意味です。主が味方であれば、どんなに多くの人が反対したとしても、勝利は主に信頼する者にやってくるのです。「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」（ローマ 8:31）困難なとき、私たちも、主が私たちのそばに立っていてくださることを知りましょう。主が私たちの味方であることを信じて、すべてを主に委ねましょう。

（祈り）

「正しい者の悩みは多い。しかし、主はそのすべてから彼を救い出される。」（詩篇 34:19）父なる神さま、きょう、私たちは、主がパウロのそばに立ち、強めてくださったので、パウロが多く苦しみの中でも、キリストを証しし続けることができたことを学びました。私たちも、あなたの恵みによって力づけられて歩むことができるよう、助け、導いてください。救い主、イエス・キリストのお名前です。

私のように 使徒 26:26-29

26:26 王はこれらのことをよく知っておられるので、王に対して私は率直に申し上げているのです。これらのことは片隅で起こった出来事ではありませんから、そのうちの一つでも王の目に留まらなかったものはないと信じます。

26:27 アグリッパ王。あなたは預言者を信じておられますか。もちろん信じておられると思います。」

26:28 するとアグリッパはパウロに、「あなたは、わずかなことばで、私をキリスト者にしようとしている。」と言った。

26:29 パウロはこう答えた。「ことばが少なからうと、多からうと、私が神に願うことは、あなたばかりでなく、きょう私の話を聞いている人がみな、この鎖は別として、私のようになったださることです。」

一、カイザリヤでのパウロ（24章）

23章には、パウロが歩兵二百人、騎兵七十人、槍兵二百人に守られてカイザリヤの総督のもとに送られたことが書かれていました。この時の総督はアントニオ・ペリクスという人で、彼はドルシラを三番目の妻として迎えていました。ドルシラは使徒12章の「ヘロデ王」、すなわちアグリッパ一世の娘です。彼女の兄はあとで出てくる「アグリッパ王」、つまりアグリッパ二世でした。ペリクスはこうした婚姻関係や人間関係を利用して地位を得た人物でした。ユダヤ人の歴史家ヨセフスは「彼は奴隷のような根性で王者のように振る舞った」と酷評しています。使徒24:26には、彼が賄賂を求めてパウロを度々呼び出したことが書かれています。ペリクスは、パウロ

がなんの犯罪も犯していないことを知っていましたが、ユダヤ人の歓心を買うため処分を引き伸ばし、自分の総督としての任期が終わるまでパウロを監禁したままにして、この厄介な問題を次の総督に丸投げしました。

パウロは、誠実な千人隊長クラウデオ・ルシアに命を助けられました。この不誠実な総督のために二年間もカイザリヤに足止めをくらい、自由を奪われました。私たちも、良い人に出会えば大きな祝福になりますが、とんでもない人に出会えば、大きな被害を被ります。そして、どんな人に出会うかは、私たちにはコントロールできないことが多いのです。そんなとき、不幸な出会いを恨んだり嘆いたりするのですが、そうしたところで何の解決もありません。そんなときこそ、神が最悪と思えることがらの中にも、働いておられることを信じなければなりません。パウロはローマ 8:28 で「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」と言っています。この言葉は、「悪いこともあれば良いこともある。だから良いめぐり合わせを待ちなさい」という意味ではありません。そういうことなら、誰もが知っています。「神がすべてのことを働かせて益としてくださる」というのは、神が、すべてのものの主であり、すべての上に主権を持っておられ、それを治め、導いておられるということです。「私たちは知っています」というのは、理論としてでなく、生活の中で体験して知っているという意味で

す。そして、この知識は、「私たち」、キリストを信じる者だけが知ることができるもの、キリストを信じることによって得られるものなのです。私たちの苦しみは、パウロが受けた苦しみに比べれば小さなものかもしれませんが、それでも、なぜ、こんなことが起こるのだろうと、当惑してしまうようなことに出会います。そんな時こそ、「神はすべてを治めておられる」、「神を愛する人々のためにすべてを働かせておられる」ことを知りましょう。そして、この信仰の知識に導かれて、苦しみや痛みを乗り越えていきたいと思えます。

二、新総督のもとでのパウロ（25章）

さて、ペリクスの後任にポルキオ・フェストがやってきました。いつの時代も、どこの国でも、政治家たちには、重要な地位に着いたらすぐに「挨拶回り」に行くという慣習がありました。新総督フェストもエルサレムに行つて祭司長や主だった人たちと会いました。彼らはまだパウロ殺害の執念を持ち続けパウロをエルサレムに呼び寄せたいと総督に言いました。しかし、フェストはそれを許さず、訴えたいことがあるなら、その人たちがカイザリヤに来るように言いました。

人々がユダヤからやって来てパウロについて、多くの罪状を申し立てましたが、立証することができませんでした。そのときフェストは、ユダヤ人の歓心を買おうとして、パウロに、「あなたはエルサレムに上り、この事件について、私の前で裁判を受けることを願うか」と尋ねました。パウロは即座にそれを拒んで、「私はカイザ

ルに上訴します」と言いました。そしてそれが許され、パウロはローマに行くことになったのです（使徒 25:11-22）。

ローマ市民には、裁判のどんな時点でも、「カイザルの法廷」、つまり、ローマでの上級法廷に訴える権利がありました。それは、ローマが始まって以来の定めでした。これはローマ市民にだけに与えられていた特権でした。パウロはこれまでもローマ市民としての特権を用いてきましたが、ここでも、それを用いたのです。パウロは父親がローマの市民権を持っていましたので、生まれつきのローマ市民でしたが、神は、この時のために、パウロをローマ市民として生まれさせられたのかもしれない。

パウロがエペソで伝道していた時、主は彼の心に「私はそこ（エルサレム）に行ってから、ローマも見なければならぬ」（使徒 19:21）という思いを与えられました。そしてエルサレムでは、パウロの側に立ち、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならない」（使徒 23:11）と言われました。けれどもパウロは、自分がいつ、どうやってローマに行くのか具体的なことは何も知りませんでした。しかし、この時のパウロの一言、「私はカイザルに上訴します」という言葉が、パウロのローマ行きを決定したのです。パウロは、囚人としてでしたが、公費で、兵士たちに守られて、ローマ市民の当然の権利によって堂々とローマに向かうことに

なったのです。それは、パウロも想像していなかったことでした。パウロは、のちに、ピリピ人への手紙にこう書いています。「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行ないなさい。」（ピリピ 2:13-14）パウロの心に「ローマに行く」という志を立ててくださった神は、パウロも、他の誰も考えなかった方法で、パウロをローマに送り出し、その志を実現してくださったのです。その時や方法は知らされていなくても、神は必ずみこころにかなう願いを実現して下さいます。「つぶやかず、疑わず」その時を待ちたいと思います。

三、アグリッパ王への証（26章）

パウロはローマに送られる前に、もう一度、キリストを証しする機会を与えられました。それは、アグリッパ王が夫人のベルニケを伴って新総督フェストを表敬訪問したことによってもたらされました。「アグリッパ王」、つまりアグリッパ二世が父のあとを継いだのはまだ17歳の時でしたので、彼は領土をローマに返し、ユダヤが再びローマ総督の直轄地になりました。そのことで、彼はローマ皇帝から信頼され、今日のレバノンに領土を与えられ、それを良く治めました。またユダヤ人からも信仰の擁護者として尊敬され、ローマとユダヤの双方と良い関係を持っていました。総督はアグリッパ王の意見を聞いたかったし、アグリッパ王もパウロに興味を持ったので、パウロはアグリッパ王ばかりでなく、総督

や、カイザリヤの高官たちが居並ぶ中で、キリストを証しする機会を与えられたのです。

これは、イエスが言われたことの成就です。イエスは弟子たちに言われました。「いいですか。わたしが、あなたがたを遣わすのは、狼の中に羊を送り出すようなものです。ですから、蛇のようにさとく、鳩のようにすなおでありなさい。人々には用心しなさい。彼らはあなたがたを議会に引き渡し、会堂でむち打ちますから。また、あなたがたは、わたしのゆえに、総督たちや王たちの前に連れて行かれます。それは、彼らと異邦人たちにあかしをするためです。」（マタイ 10:16-18）パウロは、ユダヤ人にも異邦人にも、知識人にも大衆にも、高い地位にある人にも低い境遇にある人にも福音を証しし、伝えたいと願っていましたが、ここでは地位ある人々に証しする機会を与えられたのです。

パウロはキリストを信じる以前の自分のことから話し始めました。彼はかつてはキリストに敵対し、キリストを信じる者を苦しめていました。しかし、復活されたキリストが彼に現われたとき、彼はキリストを信じるだけでなく、その信仰を人々に宣べ伝える務めをも、キリストから与えられ、それを実行してきました。パウロは言いました。「そして、預言者たちやモーセが、後に起こるはずだと語ったこと以外は何も話しませんでした。すなわち、キリストは苦しみを受けること、また、死者の中からの復活によって、この民と異邦人とに最初に光を宣べ伝える、ということです。」（使徒 26:22-23）パウロ

は、他のところと同じように、ここでもキリストの十字架と復活を語っています。

フェストは「復活」のことを聞くと、「気が狂っているぞ。パウロ。博学があなたの気を狂わせている」と叫びましたが、パウロは落ち着いて、「フェスト閣下。気は狂っておりません。私は、まじめな真理のことばを話しています」と答えました。そして、アグリッパの方を向いてこう言いました。「王はこれらのことをよく知っておられるので、王に対して私は率直に申し上げているのです。これらのことは片隅で起こった出来事ではありませんから、そのうちの一つでも王の目に留まらなかったものはないと信じます。アグリッパ王。あなたは預言者を信じておられますか。もちろん信じておられると思います。」（使徒 26:25-27）パウロが伝えているキリストの十字架と復活は、モーセと預言者たちが教えてきたことです。アグリッパはモーセと預言者、つまり聖書を知り、信じていました。それでパウロは聖書に訴えて、アグリッパ王に信仰を勧めたのです。イエス・キリストを信じることは、聖書の当然の結論なのです。

アグリッパ王はそのことをすぐに察して、「あなたは、わずかなことばで、私をキリスト者にしようとしている」と、パウロに返答しました。たった一回の話を聞いただけで、信仰を持つなどできないと言いたかったのでしょう。しかし、パウロはこう言いました。「ことばが少なかりうと、多かりうと、私が神に願うことは、あなたばかりでなく、きょう私の話を聞いている人がみ

な、この鎖は別として、私のようになってくださることです」(29節)と言いました。パウロは、「私のようになってください。」パウロは、ここで、キリストを信じることを説いただけではなく、キリストを信じて生かされている自分を見せています。パウロの話聞いた人の中には、パウロの語ることをすぐには信じられなくても、パウロの姿を見て「パウロの語っていることは本当のことだ」と感じた人も多くいたと思われます。私たちも、人々が私たちを見て、「あの人のように、あの人たちのようにになりたい」と思ってくれたらと願います。人に自分を見てもらうと言っても、完璧な模範として自分を示すということではありません。私たちお互いは完璧ではありません。足りないところのほうが多いでしょう。しかし、その足らなさを常に補っていただき、弱さを常に強めていただきながら生きている、そんな姿は見ただけだと思います。

ずいぶん以前のことですが、日本のある教会で、ひとりの宣教師が説教していました。一番前に座っていた初老の女性はその宣教師の顔を見上げてお話を聞いていました。礼拝が終わってから、宣教師が彼女に聞きました。「私のお話が分かりましたか。」彼女は答えました。「いいえ、ちつとも。」宣教師は言いました。「でも、あなたは、私の顔をじっと見ていましたね。」すると、彼女はこう言ったのです。「ええ。先生のシャツの襟元のほころびがきれいに縫ってあるのを見ていたのです。アメリカのような豊かな国の人があつれたシャツを

縫い直して着ているのが信じられなかったのです。日本で教えを広めるために、ずいぶん苦勞なさっているのだろうと、思いながら見ていました。大変失礼なことをしてしまいました。」そして、こう付け加えました。「でも、あなたがそんなにしてまで話しておられるイエスさまのことは、きっと本当のことだろうと思います。私もイエスさまを信じたいです。」

パウロは言いました。「きょう私の話を聞いている人がみな、…私のようになったださることです。」私たちもそんな気持ちで、イエスのことを伝えたいと思います。また、「あの人のような信仰に倣いたい」という気持ちで、他の信仰者の証を聞いて励まされたいと思います。

(祈り)

父なる神さま、私たちは、主イエスがパウロの生涯に働いて、彼を守り、支え、導いてくださったこと、まわりの人々や状況に働きかけ、万事を益にしてくださったことを学んできました。同じ主が私たちの人生をも導いてくださいます。そのことを信じて、この週も前に向かって進むことができますよう、助けてください。主イエスのお名前です。

福音の勝利

使徒 28:30-31

28:30 こうしてパウロは満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、

28:31 大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。

一、ローマへの旅 (27:1-8)

使徒 25 章にはパウロがカイザルに上訴してローマに行くことになったこと、26 章にはアグリッパ王に証をしたことが書かれていました。パウロが証を終え、人々が退場してから、王と総督は「あの人は、死や投獄に相当することは何もしていない」と言っています。パウロの弁明と証はアグリッパとフェストの心に届いたのです。ふたりは共にパウロの潔白を認め、アグリッパは「この人は、もしカイザルに上訴しなかったら、釈放されたであろうに」と言ってパウロに同情しています（使徒 26:31-32）。しかし、パウロがローマの法廷に上訴したことの背後には、神の導きがありました。パウロがカイザリヤで釈放されたとしても、そこはまだエルサレムの祭司長たちの影響が及ぶところで、身の安全は保証されません。神は、パウロを最も安全な場所、ローマに、最も安全な方法で送ろうとされたのです。

使徒 27:1 に「さて、私たちが…」とあり、2 節に「アリスタルコも同行した」とあるように、ルカとアリスタルコがパウロと一緒にローマに向かいました。当時地位あ

る人は一人旅はしませんでした。主人を世話するしもべが必ず付き添いました。しもべを従えていないような人は軽く見られたのです。それで、パウロもルカもアリストタルコもみなキリストにあっては等しく「兄弟」であり、互いに「同労者」でしたが、ルカとアリストタルコは進んでパウロの「しもべ」になることを申し出てパウロに同行したのです。ふたりは実際にパウロの「しもべ」になって、何くれとなくパウロの世話をしたことだろうと思います。

このことは、パウロをローマまで連れていく務めを与えられた百人隊長ユリアスに良い印象を与えたことでしょう。百人隊長がパウロに親切にしたのは（使徒 27:3）、総督からそうするように命じられ、彼自身も親切な人だったからでしようが、同時に、「パウロがふたりのしもべを従えた風格のある人物」として、彼の目に映ったからだと思われます。

主はパウロがまだエルサレムにいたとき、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならぬ」（使徒 23:11）と言ってパウロを励ましてくださいました。パウロを支えたのは、共にいてくださる主です。そして、主が共にいてくださることは、主の約束の言葉によって確認されました。また、パウロは、自分と一緒にローマに行ってくれる兄弟や自分に親切にしてくれる百人隊長を通して、主の言葉が真実であることを一層確信することができたのです。神は人を通して、私たちを

慰めたり、励ましたりしてくださいます。私たちも、信仰の友が身近にいてくれたり、まだ信仰を持っていない人であっても、誠実な人や親切な人に出会うとき、「わたしはあなたと共にいる」という主の約束が真実であることを実感するようになります。ですから人との交わりを大切にし、その中にある神の恵みを見落とさないようにしたいと思います。また、私たちもルカやアリストアルコのように他の人の助けとなることによって、神の恵みを届ける存在になれたら幸いだと思います。

二、嵐と難船 (27:9-28:10)

さて、パウロを乗せた船はカイザリヤからシドンへ、シドンからミラへと向かいました。シドンを出たときから向かい風だったのですが、潮の流れに乗ってミラに着きました。

19世紀は「聖書はすべて作り話だ」という考えが広まった時代でしたが、そうした時代に、James Smith という人はルカが記した航路について、客観的な立場から綿密な調査をしました。彼自身、地中海でヨットを操縦してきた人で、彼はそれぞれの季節の地中海の潮の流れや風向きを知り尽くしていました。そして、調査の結果、ルカが書き残した航海の記録がじつに正確なものであることが証明されました。たしかに、ルカの書いたローマへの船旅は、事実を正確に伝えていますが、それだけでなく、じつにドラマチックです。そこで起こった出来事の背後に、パウロが「私の仕えている神」と呼んだイエ

ス・キリストの父なる神がおられたことが見事に描かれています。

6節にあるように、パウロの一行はミラで「イタリヤへ行くアレキサンドリヤの船」に乗り換えました。当時エジプトはローマの穀倉でした。エジプトで収穫した穀物は、貨物船でアレキサンドリアからローマへと頻繁に運ばれていました。ミラはその貨物船の中継地だったのです。しかし、この船は外海の強い風のためほとんど進むことができず、クレテ島の南にある「良い港」（Fair Havens）に避難し、そこで風向きが変わるのを待ちました。

比較的穏やかな地中海でも、秋が過ぎ、冬が近づくと、航海は危険でした。逆風のため船は予定をはるかに遅れ冬までにローマに着くことができないことが分かると、船長は冬を過ごすのに良いと思えるピニクスまで進むことを決めました。パウロは今、船を出すのは危険だと警告しましたが、百人隊長は「パウロのことばかりより、航海士や船長のほうを信用し」ました（使徒 27:9-10）。百人隊長はパウロを尊敬し、彼に親切にしましたが、信仰がなかったため、神がパウロを通して語っておられたことが分からなかったのです。

風向きが変わったので、このときとばかり船は港を出ました。ピニクスまではほんの100マイルほどの短い距離でしたので、人々は安心していましたが、港から出て間もなくして、「ユーラクロン」という暴風に巻き込

まれました。人々は、積み荷も船具もみな捨て、14日間漂流しました。

その時パウロは立って人々を励ましました。「皆さん。あなたがたは私の忠告を聞き入れて、クレテを出帆しなかったら、こんな危害や損失をこうむらなくて済んだのです。しかし、今、お勧めします。元気を出しなさい。あなたがたのうち、いのちを失う者はひとりもありません。失われるのは船だけです。昨夜、私の主で、私の仕えている神の御使いが、私の前に立って、こう言いました。『恐れてはいけません。パウロ。あなたは必ずカイザルの前に立ちます。そして、神はあなたと同船している人々をみな、あなたにお与えになったのです。』ですから、皆さん。元気を出しなさい。すべて私に告げられたとおりになると、私は神によって信じています。私たちは必ず、どこかの島に打ち上げられます。」（使徒27:21-26）パウロの言葉のとおり、船はマルタ島に打ち上げられ、乗組員、百人隊長とその兵士など誰一人損なわれることなく、マルタ島の首長ポプリオという人にもてなされて冬を過ごすことができました。この間、人々を励まし、指導したのは、百人隊長でも、船長でもありませんでした。囚人のパウロだったのです。

船が嵐に巻き込まれたとき船長や航海士が持っていた知識や技能は役に立ちませんでした。何日も漂流し、助かる見込みがなくなったとき、百人隊長は自分に授けられていた権威をもってしても何もすることができませんでした。人の力の及ばないことが起こり、人々が生きる

希望を失くしてしまうとき、人々を立ち上がらせることができるのは、神の言葉を持つ人であり、神の言葉そのものなのです。百人隊長や船長は、今は、パウロを通して語られる神の言葉に聞き従う者となり、その神の言葉によって自分たちの命を救ったのです。

ガリラヤ湖の嵐を鎮められた主は、地中海の嵐からパウロを守ってくださったのです。よく人生は航海に例えられます。人生の航海はいつも順調とは限りません。そこに嵐が吹き荒れることは一度や二度ではないでしょう。また航路を外れ、方向を見失うこともあるでしょう。しかし、神の言葉を持つ者は、それによって嵐を乗り越え、行くべき方向を示され、最後には「望む港」（詩篇 107:30）に着くことができるのです。神の言葉には、たましいを救うだけでなく、実際的なことがらにおいても、人を救う力があることを覚えておきたいと思えます。

三、ローマでのパウロ (28:11-31)

「使徒の働き」の最後の部分には、パウロがローマに到着したことと、ローマのユダヤ人を説得しようとしたことが書かれています。パウロは自分の家に住むことを許されました。そこから外出することができませんでした。人を招くことは許されました。それでパウロはまず、ローマのユダヤ人たちを招きました。パウロは「異邦人の使徒」でしたが、彼は常に同胞ユダヤ人の救いを願っていました。ユダヤの人々はまことの神を知り、聖書を持っており、それによって、どの民族よりも先にキ

リストを知らされていたからです。パウロは、ローマにいるユダヤの人々に朝から晩まで語り続け、「モーセの律法の書と預言者たちの書によって、イエスのことについて彼らを説得しよう」としました（23節）。そのうちの一部は信じましたが、多数は信じませんでした。それで、人々が帰っていく時、パウロは宣言しました。「神のこの救いは、異邦人に送られました。彼らは、耳を傾けるでしょう。」今まで、ユダヤの人々に優先して語られてきた福音は、これから後は、異邦人に優先して語られるというのです。

そして、それはその通りになりました。28:30-31にこうあります。「こうしてパウロは満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。」パウロはこの時、まだ裁判を待っている状態で、ローマ兵の監視のもとにありました。ところが、聖書は、そのような立場の人が「大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた」と言っているのです。ローマでは、ユダヤ人による妨害はありませんでしたし、この時はまだローマの権力による迫害も始まっていませんでした。パウロは文字通り、何にも妨げられずに伝道できました。パウロの家は、宣教団体の本部のようになり、多くの人々がそこから各地に派遣されました。

30節の「満二年」という数字には意味があります。パ

ウロはエルサレムの祭司長たちから訴えられ、ローマの法廷に上訴していたのですが、そうした場合、一年半の間に法廷が開かれ、判決が下されなかったら、上訴した人の言い分が通り、その人は自由になるという規則がありました。ローマの上級審では、確かな証拠もないのに、みだりに人を訴えるようなことがあれば、訴えた側が罪を問われましたので、おそらく、エルサレムの祭司長たちはローマに行って法廷に出るのをためらい、パウロに対する訴えを取り下げたのだらうと思われます。ですから「満二年の間」という言葉は、パウロがその後自由になったことを言い表しています。「使徒の働き」は、パウロの釈放を知らせ、福音の勝利を宣言して終わっているのです。

17世紀から18世紀にかけて聖書のギリシャ語学者として大きな貢献をしたヨハナン・アルブレヒト・ベンゲルは使徒28:30-31についてこう言っています。「パウロのローマ到着、福音宣教の最高潮、使徒の働きの大団円、これこそ神の言葉の勝利である。…じつに使徒の働きはエルサレムに始まり、ローマに終わる。」使徒の働きは、ペンテコステの日、エルサレムでペテロによって語られた福音が、ローマでも、パウロによって語られ、ローマの全土に力強く広まっていったことを描いているのです。パウロがローマに向かったのは、フェストが総督に就任したときで、それは59年か60年でした。パウロがローマで満二年を過ごしたときには63年ごろになっていました。ですから「使徒の働きは」30年のペンテコス

テから 63 年のパウロの釈放までの 30 数年間の出来事を描いていることになります。わずか 30 年、一世代も経たないうちに、福音がこれほどに広まったのはじつに驚くべきことで、同じようなことはどの時代にもありませんでした。

64 年ローマに大火災が起こり、「キリスト者が放火した」という根も葉もない噂が流れ、キリスト者への迫害が始まりました。パウロも紀元 67 年にローマで殉教しました。しかし、使徒たちの殉教や、その後の大規模な迫害にもかかわらず、福音は、ローマ帝国の隅々まで広められていきました。使徒たちが世を去っても、その働きを引き継ぐ人々が次々に起こされ、御言葉は世界に広がりました。「使徒の働き」が宣言した福音の勝利は、ローマの迫害によってもキャンセルされませんでした。神の言葉は今にいたるまで、世界中に広がり続けています。この神の言葉が、私たちが生かし、養い、強め、導いてくれるのです。そのことを信じて、もっと御言葉に信頼して日々を歩みたいと願います。

(祈り)

父なる神さま、あなたの言葉には世界を創造し、人々を造り変え、身も心も癒やし、強める力があります。パウロをはじめ、使徒たちや初代のキリスト者たちの力強い信仰の生涯や伝道の働きは、彼らが神の言葉の力を知り、それに信頼していたからでした。私たちも、御言葉に信頼することによって、その力を知り、体験できますよう、導いてください。主イエスのお名前です。

幸いである ヨハネの黙示録 1:1-3

1:1 イエス・キリストの黙示。これは、すぐに起こるはずの事をそのしもべたちに示すため、神がキリストにお与えになったものである。そしてキリストは、その御使いを遣わして、これをしもべヨハネにお告げになった。

1:2 ヨハネは、神のことばとイエス・キリストのあかし、すなわち、彼の見たすべての事をあかしした。

1:3 この預言のことばを朗読する者と、それを聞いて、そこに書かれていることを心に留める人々は幸いである。時が近づいているからである。

聖書は全部で 66 巻あります。長い年月の間、多くの人々によって書かれたものが一冊にまとめられたものです。旧約はイエス・キリストが来られる前、およそ千年の間に書かれ、新約はキリストが天にお帰りになってから、およそ 40 年のうちに書かれました。「ヨハネの黙示録」は 95 年ごろ、最後に書かれた聖書です。読むと分かりますが、他の聖書と全く違った文章表現で書かれています。このように象徴的な言葉で未来のことを描く文学を「黙示文学」というのですが、その呼び名は「ヨハネの黙示録」の「黙示」という書名から来ています。

「ヨハネの黙示録」を学ぶには、多くの時間と努力が必要です。礼拝ではその一部しかとりあげることができません。きょうは、黙示録にある「幸いである」という言葉をとりあげます。黙示録には「幸いである」という言葉が七回出てきますが、それは、三つにまとめることができます。

一、御言葉を守る幸い

まずは「御言葉」、聖書の言葉を守る幸いです。こう書かれています。「この預言のことばを朗読する者と、それを聞いて、そこに書かれていることを心に留める人々は幸いである。時が近づいているからである。」

（黙示録 1:3）「御使いは私に『小羊の婚宴に招かれた者は幸いだ、と書きなさい』と言い、また、『これは神の真実のことばです』と言った。」（黙示録 19:9）「見よ。わたしはすぐに来る。この書の預言のことばを堅く守る者は、幸いである。」（黙示録 22:7）

ある人が聖書 BIBLE を Basic Instruction Before Leaving Earth のことだと言いました。なかなかおもしろい語呂合わせです。たしかに、聖書は十戒をはじめとして、私たちになすべきこと、してはいけないことが何であるかを教えています。しかし、聖書は私たちを事細かな規則で縛り上げるようなものではありません。親が子どもに「食事をする前は手を洗いなさい。食事が済んだら歯をみがきなさい。学校から帰ったらすぐ宿題をきなさい」などと言いますが、それはみな、子どもの安全や健康のためであり、健全な生活習慣を身につけさせるためです。親の子どもに対する愛から出でています。聖書が教えることも同じです。私たちに幸せな人生を送ることができるようにと、父なる神が語っておられる愛の言葉なのです。

人間には自由があります。しかし、それは何をしてもよい自由ではありません。魚は水の中でこそ自由に泳ぐ

ことができますが、陸にうちあげられたら、生きていけなくなります。ダラスとヒューストンを 90 分、時速 186 マイルで結ぶ High Speed Rail の工事が始まりました。日本の新幹線の技術で造られますので、大きな期待が寄せられています。しかし、この列車も、レールの上を走るかぎり、その性能を発揮できるのです。レールから外れたら悲惨なものになってしまいます。私たちも、神が敷いてくださったレール、神の言葉の上でこそ、自由であり、能力を発揮し、幸せであることができるのです。

詩篇の第一篇にこうあります。「幸いなことよ。悪者のはかりごとに歩まず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかつた、その人。まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。その人は、水路のそばに植わった木のような。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。」（詩篇 1:1-2）聖書を読み、学び、実行する人は、この言葉の通り、実を結ぶ人生を送ることができます。こうして神の言葉を聞いている私たちは、毎日それによって養われ、力づけられ、慰められており、聖書が「真実な神のことば」であることを証しすることができます。

二、聖められる幸い

次に黙示録はきよめられる幸いを教えています。「見よ。わたしは盗人のように来る。目をさまして、身に着物をつけ、裸で歩く恥を人に見られないようにする者は幸いである。」（黙示録 16:15）「自分の着物を洗って、

いのちの木の實を食べる権利を与えられ、門を通過して都には入れるようになる者は、幸いである。」（黙示録 22:14）

ここで「着物」と言われているのは、神が私たちに着せてくださった「義（ただ）しさ」、「聖（きよ）さ」のことです。私たちは罪を持っており、どこまでも義しく、すべてにおいて聖い神の前に、そのままでは出ることができません。罪を覆ってくれるものが必要なのです。黙示録には「白い衣」を着た人々が描かれています（黙示録 7:9-17）。一世紀の教会では、イエス・キリストを信じてバプテスマ（洗礼）を受けるときに「白い衣」を着ました。バプテスマの水はその人の罪が洗い流されること、「白い衣」は信じてバプテスマを受けた者が神の前に「義しい者」とみなされることを表しています。ですから、「白い衣」を着た人々とは、信じてバプテスマを受けた人々を指しています。聖書は「幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。幸いなことよ。主が、咎をお認めにならない人、心に欺きのないその人は」（詩篇 32:1-2）と言っています。黙示録が「幸いである」と言っているのは、完全無欠な人の幸いではありません。罪を犯してしまっても、それを悔い改め、そこから立ち返るなら、神はイエス・キリストのゆえに私たちの過去を咎め立てなさらず、一切の罪を赦してくださるのです。これに勝る幸いはありません。

しかし、私たちは弱い存在で、赦された罪をまた犯してしまい、神が与えてくださった白い衣を汚してしまう

ことがあります。ですから、罪の咎めから救われるだけでなく、罪の力からも救われる必要があります。罪の性質が死に義の性質が成長していく、汚れた衣が洗われ再び白くされなければならないのです。そうされることが「聖められる」ということです。では白い衣はどのようにして洗っていただけるのでしょうか。黙示録はこう言っています。「彼らは、…その衣を小羊の血で洗って、白くしたのです。」(7:14) 普通、真っ白な着物に血がつけば、洗っても簡単にはきれいになりません。染みが残ります。しかし、「神の子羊」と呼ばれるイエス・キリストの血は違います。それは、どんな罪も洗いきよめます。白い衣をいっそう白くするのは、これが神の言葉が告げるイエス・キリストの救いの力です。罪を赦されるばかりか、そこから聖められる幸い、このような幸いを与えてくださるお方はイエス・キリストの他ありません。

三、死に勝利する幸い

そして、さらに、黙示録は、死に打ち勝つ幸いを告げています。「また私は、天からこう言っている声を聞いた。『書きしるせ。「今から後、主にあつて死ぬ死者は幸いである。」』御霊も言われる。『しかり。彼らはその労苦から解き放されて休むことができる。彼らの行ないは彼らについて行くからである。』」(黙示録 14:13)

「この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キ

リストとともに、千年の間王となる。」（黙示録 20:6）

最初の言葉、黙示録 14:13 の「主にあつて死ぬ死者」というのは直接的には殉教者を意味しています。黙示録が書かれた時、殉教者が続出しました。しかし、それと同時に人生の最後の時まで信仰を守り通したすべての人も含まれます。主イエスのために、また、主イエスのゆえに他の人のために生きた人生は必ず報われます。人は「死んで終わり」ではないからです。聖書は「彼らの行ないは彼らについて行く」と言っています。つまり、地上での行いは天で報われるというのです。もし、人が「死んで終わり」なら、「あすは死ぬのだ。さあ、飲み食いしようではないか」（コリント第一 15:32）と、上手に世渡りをし、この世のものを精一杯楽しむ人が「幸いな人」であるということになります。しかし、誰も、それが本当の「幸い」でないことを知っています。

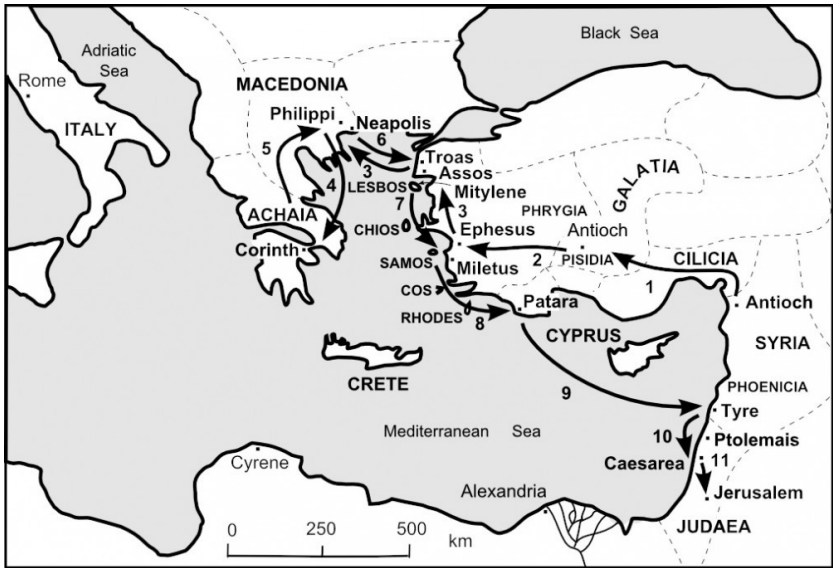
黙示録 20:6 に「この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない」とありますが、この「第一の復活」とは、イエス・キリストを信じて、キリストとともに復活すること、神の子どもとして生まれること、ブーン・アゲインを意味しています。「第二の死」というのは、死後の審判のことです。よく言われることですが「一度しか生まれえない人は二度死ぬ。二度生まれた人は一度しか死なない」のです。すべての人は、一度は死にます。しかし、信仰によって、もう一度神から生まれた者、「二度生まれた人」は、死後の裁きである

「第二の死」から救われているのです。それはイエス・キリストがあのかrossで、第一の死だけでなく、第二の死も、私たちの代わりに味わってくださったからです。イエスは、二つの死に勝利して復活されました。イエス・キリストを信じる者は、すでに死に勝利した幸いな人なのです。

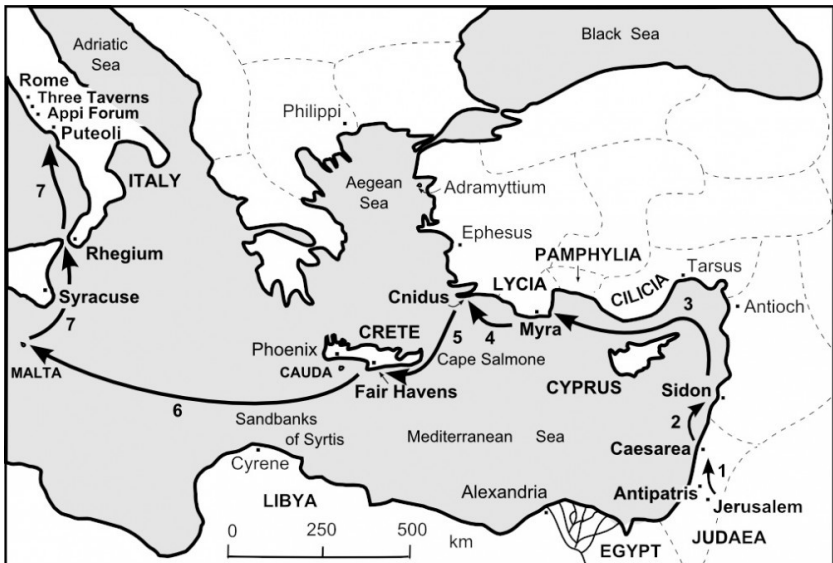
神の言葉を守る人は、神の恵みに取り囲まれ、祝福された日々を送ることができます。罪を赦され、聖められていく人は人生に平安を持つことができます。イエス・キリストの救いによってすでに死に打ち勝っている人は、人生のどんな問題にも対処して勝利を収めることができます。私たちも、そんな幸いを求め、この幸いを大切にしたいと思います。

(祈り)

父なる神さま、あなたがイエス・キリストを通してくださる「幸い」は私たちが普段考えている「幸い」とはずいぶん違います。しかし、そうした「幸い」があつて始めて、日々の幸いな生活と人生が成り立ちます。「幸いである」と宣言してくださる、あなたの力強いお言葉に導かれ、あなたから来る幸いを求める私たちとしてください。イエス・キリストのお名前です。



パウロの第3次伝道旅行



パウロのローマへの旅

日本人が知っている聖書の物語といえば、「アダムとエバ」、「ノアの洪水」、「イエスの誕生」、「イエスの十字架」くらいなもので、しかも人々が伝え聞いているものは聖書からかけ離れたものになっているかもしれません。日本人なら誰もが「桃太郎」、「カチカチ山」、「浦島太郎」、「かぐや姫」、「花咲爺さん」などといった物語を知っており、それが日本人の情緒や道徳を形づくってきました。同じように、もっと多くの「聖書物語」が日本人に語られ、親しまれるなら、それによって、まことの神を信じる基礎ができてくるのではないかと思われまます。

多くの文学者たちが「聖書物語」や日本のキリスト者の伝記、また、聖書に題材をとったキリスト教文学といわれるものを書いてきました。それらは、外国から入ってきた文学や映画などとともに、日本での伝道の下地を作ってきました。日曜学校などで、子どもたちに聖書の物語を語り伝えることも、伝道に役立っています。これからも、そうした努力が続けられ、聖書の物語がたんに「イスラエルの民族の物語」や「キリスト教のお話」としてだけでなく、神が人に語っておられる「神の物語」として、日本人に定着するように願います。



Penguin Club

www.penguinclub.net